

ヒマラヤ

No. 348



2000 NOVEMBER



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN ——— HAJ

2001年H A J サマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフの配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

尚、パキスタン登山の申請は、年内に行わなければならないので、希望者は早目の申込みにご協力下さい。

記

1. 期間：2001年7月13日(金)～8月27日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：H A Jの登山隊は、「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿に参加の義務があります。

チベット ニンチン・カンサ(7,206m)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。H A Jは既に2回登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間、ルートは1998年にH A J隊が初登攀した西稜を予定しています。

記

1. 期間：2001年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切り：定員になり次第
6. その他：H A Jの登山隊は、「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿に参加の義務があります。

表紙写真

〈ガネッシュⅥ峰付近から見たガネッシュⅠ峰(ヤンラ・カンリ)〉

信州大学山岳会はガネッシュ・ヒマールⅡ峰西面ヤラ・コーラより、過去2回80年と82年に挑んだが、難ルートのためいずれも断念した。この春18年ぶりに再挑戦したが、またしても力およばずルートを完成する事は出来なかった。写真はルート途中のⅣ峰付近から、ガネッシュ山群の盟主を見たものである。
(写真と文 田辺 治)

ヒマラヤ No.348

- | | |
|---|------|
| 1. カラコルム植物紀行(2)ー珍しき種を求めてー | 井上重治 |
| 9. ヒマラヤ・ニュース〈トピックス・地域ニュース・ヒマラヤから・Books・インフォメーション〉 | |
| 12. 崑崙・北西蔵縦断探査踏査メモ | 阿部 淳 |
| 16. 中国登山の手引き | |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

カラコルム植物紀行（2）

——珍らしき種を求めて——

井上 重治

（V）虫眼鏡植物

カラコルムのような半砂漠地帯で植物が生きてゆくのは大変きびしい。単に雨が少ないだけでなく、夏の日射が強烈で、3,300mのセイチョウでは日陰の温度が30度を超えていた。夜は夜で気温は10度を割りこむ。とりわけ、日中は強烈な太陽が反射し、夜は巨大な冷蔵庫になる氷河の近くでは昼夜の温度差が大きい。これにカラコルム特有の強風と砂嵐、落石、それに高度の影響などが加わるのである。このような自然の厳しさに対抗するために、植物は色々な防禦手段を考えだしている（厳密には対抗手段を持つにいたった植物が生きてる）。水分の有効貯蔵を行うための多肉質の葉の形成、地面からの水分の蒸発と熱の拡散を防ぐために無数の植物が寄り集まるクッションの形成などがそれである。しかし、中でも最も友好的なのが、矮少化である。小さくなれば生育のためのエネルギーは少なくてすみ、風の影響も減る。さらに地面に近くなるので温度差も減少する。しかし、全体的に縮小しても、花だけは比較的に大きい。子孫を残すための重要な器官だからであろう。

フーシェ谷でこの矮少化を如実に示したが日本でもはびこっている西洋タンポポである。高度2,500mでのタンポポ、3,300mでのタンポポ、3,800

mでのタンポポを比較すると、最初は10センチくらいあった花茎が3センチになり、最後は5mmくらいに縮小し、花卉があたかも地面にキスするくらい低くなっていた。写真7は同じく3,800mのゴンドゴロキャンプで見たキジムシロ *Potentilla Fruticosa* であるが、あまり小さいので虫眼鏡で見ないとタンポポと区別がつかない。これよりさらに小さくなったキジムシロに高度4,500mのゴンドゴロ・ダルサンパで遭遇した。この場合は高度に加えてまわりの環境が背丈に大きく影響している。

矮少化で最も印象的だったのは、秋の代表花であるリンドウである。南チロルのドロミテで見たリンドウは十勝岳のそれと同じように草丈10から15cmもある立派なものであったが、カラコルムのクンジュラブ峠（4,700m）では草丈1から1.5cmのリンドウが枯れ草に隠れて、ひっそりと咲いていた。よくよく注意しないとまず判らない。それだけに、小雪まじりの強風の中でこの可愛い紫花を見つけた時は、ルビーの宝石を発見したよりも大きな喜びであった。日本でも小型のリンドウが何種類か知られている。ヒナリンドウ、タテヤマリンドウ、ミヤマコケリンドウなど高さ4.5cmほどの小品であるが、クンジュラブ峠のものは



▲写真7. *Potentilla fruticosa*



▲写真8. *Saxifraga andersonii*

▼写真9. *Artemisia* sp



遙かに低かった。

カラコルムでは限られた種類の植物がクッションを形成するが、中でもユキノシタ科に矮少クッションが多くみられる。写真8は3,700mのチャラクサ谷で見られた*Saxifraga andersonii*のクッションである。一見こけのように見えるが、虫眼鏡でのぞくとれっきとした高等植物である。この写真は3,600mのラズダルで見かけた同じユキノシタ科の仲間である。地につかんばかり低い所に可憐な白花をつけていた。これが秋になると、パサー谷に見られたように紅葉して、荒涼としたカラコルムに一服の風情をそえるのである。

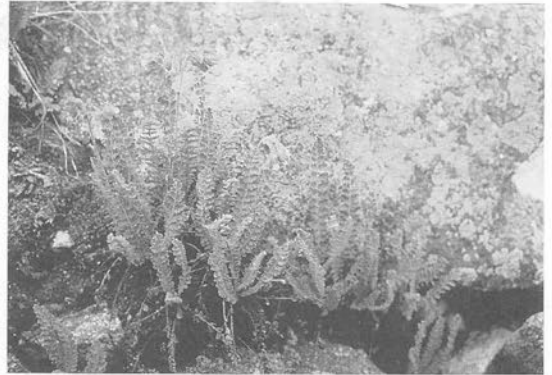
このように地表部分は矮少化していても、根のほうは意外に小さくなっていない。むしろ、環境、とくに水分がきびしいほどより深く、より太くなるように見える。石や岩の間にあっても太い根が地中深く入っていて、そのたくましさで敬服させられた。砂漠に生えている木では最深10mももぐり根があるという。それはどんなに乾燥した砂漠でも地下10mには化石水を含む水層があるからである。10m以上になると物理的に導管を通した水のくみ上げが難しくなるといわれる。

※生育環境のきびしい乾燥した高地では、何千、何万という植物が固くより集まって、あたかも一つの植物のように生育するのをクッションという。周りを囲むことによって風や気道から内部環境を一定に保とうとする植物の知恵である。

(VI) 芳香植物

よく日本人に比べて西洋人の体臭は強いといわれる。どうもカラコルムの植物も日本のものにくらべて匂いが強いように思われる。特に高山植物

▼写真10. *Biebersteinia odora*



が一斉に開花する盛夏がそうである。夏のクンジュラブ峠では植物の放出する芳香があまりに強いので、外国人はもとより、慣れ親しんでいる筈の地の牧人でさえ頭が痛くなるほどだという。

カラコルムの匂いという私は真先にヨモギの芳香を思いだす。とくにちょうどヨモギの新芽が出る春から初夏にかけては、極めて強烈な芳香を放出する。どうもカラコルムに多いクラムヨモギ *Artemisia Kurramensis* のようにサントニン（虫下しの薬）含量の多いヨモギの芳香が一番強いようである。93年4月末、パサー谷の3,600m地点にキャンプしていたらテントの中まで香りが充満してきた。その発生源を調べると、意外なことにほんとに小さなよもぎから出る芳香であった。日本のヨモギとは比較にならないその強烈な芳香はやや甘たるく、軽い興奮作用のあるようなよい匂いであるが、度が過ぎるとやはり気持ちが悪くなる。このヨモギの若葉をガスクロマトグラフィーで分析してみたら、樟脳の成分であるカンファーがたくさん含まれていた。一見地味なヨモギも秋になると黄色から赤みがかった小花をたくさんつける。（写真9）この時収穫した製油にはツヨンという神経毒の芳香成分がたくさん含まれる。この時期に広大なヨモギ草原を歩いた旅行者は頭痛がして神経がおかしくなったと19世紀の旅行者が書き残している。揮発したツヨンを吸い込んだためと思われる。実はヨモギ自体もたくさんの種類があり、種によって芳香もかなり差異があるようである。

94年6月にチャラクサ谷のケーセブンベースキャンプ（高度4,400m）に行くと桜草が満開であっ

た。疲れ果ててテントに寝ていた私を見舞うかのように、ポーターがそれを摘んで耳飾りをつくってくれた。甘たるといって心休まる感じであった。しかし、これまで体験したカラコルムの高山植物の中で、もっとも強烈な芳香植物にフーシェ谷のダルサンパでお目にかかった。ダルサンパとはバルチ語で「花の島」を意味するが、95年7月末に訪れたときは、まさにその名の通り、ここに生育していたすべての植物に花が咲いていた。その中でひととき異彩を放っていたのが、バルチ語でホロースと呼ばれる高山植物で、 Gondogoro 谷の女王とまでいわれている。写真10に示すように、赤色の岩石の合間にふくらした黄色い花をたわわにつけていたが、4千メートル以上でしか生育しないこの植物が有名になったのは、まったくその強烈な芳香のためである。ポーターがこのホロースを30本ほど束にして私にプレゼントしてくれた。テントの中に置くと、最初は上品なカレーの匂いで心地よかったが、暫くするとあまりの芳香で気分が悪くなってきて、あわてて外に放り投げた。しかし折角の貴重な花なので、そのまま捨てるの



▲写真11. フーシェ谷の *Rosa webbiana*

にしるびず、手帳にはさんで押し花にして日本に持ちかえた。この時手帳の紙に残ったホロースの芳香は三ヵ月たっても残っていた。このホロースの学名は *Biebersteinia odora* (フウロソウ科) で、その学名からも全身が芳香の塊であることをよく示している。

カラコルムを代表する名花であるウェップバラ (*Rosa webbiana*) も香りの強いことで知られている。大体10から20m先からその存在はわかるという。最近このバラの芳香成分を分析したら、世にも珍しい1、2-ゲエチルサイクロブタンという芳香物質がたくさん含まれていることが分かった。ヒマラヤも含めて芳香の強い植物は *Artemisia* のようなキク科のものに比較的が多い。このほかには *Ajania* や *Rhododendron anthopogon* などの芳香が強い。

何故カラコルムの植物に芳香が強いのであろうか。カラコルムの夏が短いので、効率的に花を結実させる必要がある。したがって虫媒介花の場合には、この芳香で昆虫を誘因していることが考えられる。風媒花の場合は雄花と雌花のコミュニケーションに使うことも考えられる。ヨモギのようにまだ開花していない若芽の季節に強い芳香を出すのは、動物の食害を避けるのに役立っているものと思われる。柔らかい若芽の時が一番食べられやすいからである。しかしどうもそれだけではないように思われる。あれだけたくさんの芳香成分を製造して放出するにはかなりのエネルギーが必要で、別の生存の理にかなった役割をしているように考えたい。その有力な理由の一つは多量のテルペン類を放出することにより、外の植物の成長を妨げる点にあり、アレロパシイ現象と呼ばれている。荒れ地に広大なヨモギ草原が出現するのはこのためである。

一般に食物間では芳香を通して情報のやりとりをしていることが知られている。害虫や病原菌によってある植物がやられると、特有の揮発成分を出して他の仲間に危険を知らせる。このために仲間植物は抵抗性の成分を急遽合成して予想される被害に備えるという。はたしてヨモギの芳香は天敵である家畜への対抗手段の外に、仲間同志の情報シグナルに利用しているのであろうか。

植物の芳香は単に植物だけでなく動物にも大きな影響を与える。30年代にフランスで創始された「芳香療法」(アロマテラピー)や最近巷で盛んにいわれる「フィトンチット」と呼ばれる植物の揮発成分を吸う森林浴などがその例である。薬局方にも、ユーカリ、ハッカ、チョウジ、ケイヒ、オレンジ、ウイキョウ油などの芳香性生薬Aromatic drugsがあり、さらに日本では香道という芸道が開かれ、匂い袋が珍重されている。医学的にみても森林浴の主成分であるテルペン系の香りは脳波のアルファ波を増加させて鎮静作用を示し、一方末梢血管の拡張作用のあることも判っている。著者らの研究によればテルペン類は溶液よりも気体状態で百から千倍も強い抗菌力を示すことが明らかになっている。植物の感染防御策として、粘液物などを生産するよりも少量の揮発油を発散させて保護した方がはるかに効率的と思われる。カラコルム植物の強烈な芳香もこのような種の保存に寄与しているのであろうか。

ヒマラヤ秘薬といえば、現地の人はシラジット Shilajitの名前をあげる。シラジットは「岩の汗」とも「植物化石」ともいわれ、老化を止めて若返る「不老不死」の生薬として有名で、精力増強剤として用いているという。中央アジア、アフガニスタン、パキスタン、インド、ネパール、ブータン、チベットの1000-5000mの険しい山岳地帯に産出する黒褐色の固まりで、一見石炭を思わせる。特有の芳香性樹脂で、インドの伝統医学であるアユルヴェーダーの重要な配合薬になっていて、インドの研究者を中心に膨大な研究報告があるが、その正体は完全には解明されていない。Ghosalらによれば、トウダイグサ科の *Euphorbia royleana* (多肉ユーフォルビアと呼ばれ、サボテンに近似)の乳液が土壌成分と反応して生成したといわれる。一方、Shahjahanらによれば、エゴノキ科の *Styrax officinalis* の樹脂の安息香が主体だという。その有効成分はbenzopyrone系物質に芳香性テルペン、フェノール類が加わったものといわれ、薬理的には免疫調整作用、抗健忘症、抗酸化作用、抗潰瘍作用などが確認されている。シラジットはカラコルムの現地でもなかなか入手困難であったが、たまたま99年の夏、イスラマバード・

▼写真12. *Colutea multiflora*



日パトラベル社の督永忠子さんから突然生葉が送られてきた。なんでも、最近フンザで良質のシラジットが発見されたとのことであった。同じ頃、アジア研の深町宏樹さんからもシラジットの提供を受けて現在分析中である。カラコルム植物に対する新しい研究の夢が広がりつつあるのは、嬉しい限りである。

(Ⅶ) その他の変わり種植物

7-1 まめ科のコルテア・マルチフローラ

92年9月、スカルドからフーシェ村へ通ずる道路が鉄砲水のために二箇所です断されていて、歩いてフーシェ谷を往復するはめになった。茶褐色の岩石におおわれたフーシェ谷はそうでなくても荒涼とした月世界を思い出させるが、ほとんどの花の散った秋はとりわけその感が深かった。まだ日射の強い太陽を浴びてほこりっぽい谷道を歩いていると、ちらほら点在する茂みの中になにやら袋状のものが目についた(写真12)。そこで、メギの刺に悩まされながら近づいてみると、小さな灌木の枝に5センチ前後の茶色の袋がたくさんぶら下がっていた。最初のはっきり越冬する蓑虫のさなぎの入った袋か、さもなければヤマカイコのまゆかと思ったが、それにしてもこんなにたくさん、しかも一枝に三つづつ規則的にぶら下がっているのは奇怪しいと思って押してみた。すると、乾いた音をたてて袋が破れ、中には豆が一杯詰まっていた。図鑑によれば *Colutea multiflora* で、季節にはマメ科特有の美しい黄花を咲かせるという。

▼写真13-1. 開花期のLindelofia Stylosa



それにしても素人目には虫かごと映った袋が専門家には膀胱の形に見えたらしくて、ボウコウマメ属というあまり夢のない名前がつけられてしまった。別にこの袋が中華料理の餃子に見えるのでギョウザソウと名付けた人もいる。日本ではあまり見かけない植物なので調べてみたら、これもどうやら地中海方面からやって来たらしい。

7-2 ムラサキ科のリンデロフィラ・スティローサ

リンデロフィラ *Lindelofia Stylosa* (ムラサキ科) はカラコルムを中心とするカシミール地方に特有な植物で、珍しく大型である。日本には似た植物はない。この植物の群落に最初に出会ったのは94年6月、ゴンドロ谷を登っている時であった。ふさふさした長い葉のなかに不気味な青紫のチューブ状の花を下に垂れ、その真ん中から白い雌しべの花柱を突き出していた。一度見れば絶対に忘れない特異な形である(写真13-1参照)。一見蕾のように見えたので、何時花が開くのか地元の人に聞くと、「もう花は咲いている」と笑われた。

ゴンドロ谷では3,600m-4,200mに生育する典型的な高山植物であるが、結実期になると、実に不思議な変化を示した。ピラミッド型の小堅果ができる頃になると、花幹がするすると伸びてきて、長いつるに堅果が次々にぶら下がったような形になった(写真13-2)。一体どこまで伸びるのか、とうとう最後まで見届けられなかった。

7-3 たで科のビストルタ・ワクチニフォリア

95年9月も中旬を過ぎると、高度4,500mのポトダスの広大な山の牧場はすべての家畜が去ってがらんとしていた。食べ残された高山植物も大方枯れ果てていたが、その中で赤光るこのビスト

ルタ *Bistorta affinis* (タデ科) の群落が一際目立っていた。カラコルムからヒマラヤの4千メートル前後に生える植物で、初夏はピンクの円筒状の穂状の花がたくさん直立するのが特徴である。日本の植物は花期が終わるとしおれることが多いが、このビストルタは花が終わってもそのままの形でドライフラワーになっていた(写真14)。ごわごわした堅い花序は強く握ると、うすいガラスのようにぐずぐずに崩れてしまった。いかにも乾燥地にふさわしい最後の姿である。このビストルタのもう一つの特徴は木質性の茎が円形のカーペット状に地面を這うことで、一本一本の円形に加えて全体の集落も円形に展開していた。毒性があるためか、家畜が全く食べないので、方々に大きな群落が見られる。

7-4 きんぼうげ科のバラキレギア植物

95年7月末、カラコルムの新種植物を求めてゴンドロ谷に登った。折からちょうど夏の花の最盛期で、すべての草に花が咲いている感じであった。とりわけ目についたのが *Pseudomertensia mothionoides* (むらさき科) の紫花と *Saxifraga sibirica* と (ユキノシタ科) と *Silene moorcroftiana* (ナデシコ科) の白花の群落であった。そのうち、一人のポーターが小さな茎に真っ白な大型



▲写真13-2. 結実期のLindelofia Stylosa

▼写真14. *Bistorta affinis*



の花のついた植物を取ってきた。茎には今まで見たことのない長い剛毛が密生しており、すこぶるユニークな高山植物であった。早速そのポーターを案内させて咲いている現場へ行ったら、案に相違して絶壁の中程にあり、とても私には登れない。そこでガイドに私のカメラを託して現場の写真を撮ってもらった。岩アネモネ *Rock anemone* の一種とみられ、*Paraquilegia microphylla* (キンボウゲ科) と思われた(写真15)。しかし、現地のポーターにもなじみの薄い種なので、新種の可能性があるのではないかと目下専門家に判定を依頼中で、私はまだ夢を持ちつづけている。

7-5 たで科のレウム・チベティキューム

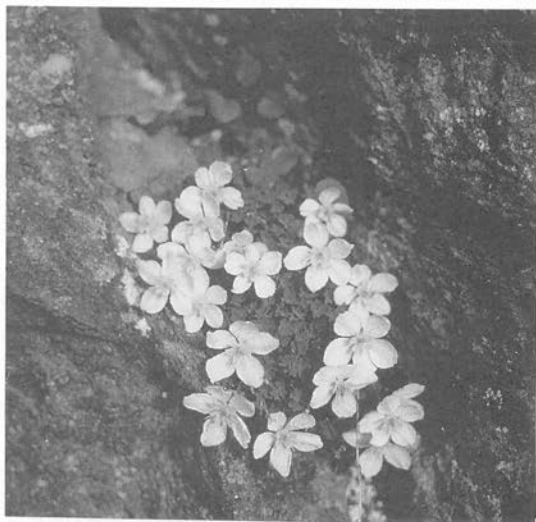
カラコルムの6月はまだ残雪の季節で、フーシェ谷も3,500m以上には豊富な残雪があった。スパンセルの上部、チャラクサ氷河右岸の4,000m付近の融けかかった雪をかき分けると、図16-1に示すような真っ赤に燃える小さな芽生えが現れた。一見キノコのように見えたこの新芽は雪が融けて数日間太陽にあたると、図16-2のように赤から黄色の衣に変身する。さらに数日経つと図16-3に示すように茎は赤くなり、葉は広がって緑色の

葉緑素ができてくる。さらに数週間経つと、図16-4に示すように大きな葉が何枚も成長してくる。ことここに至ってこの奇妙な植物はキノコではなく、れっきとした高等植物であることは明らかである。

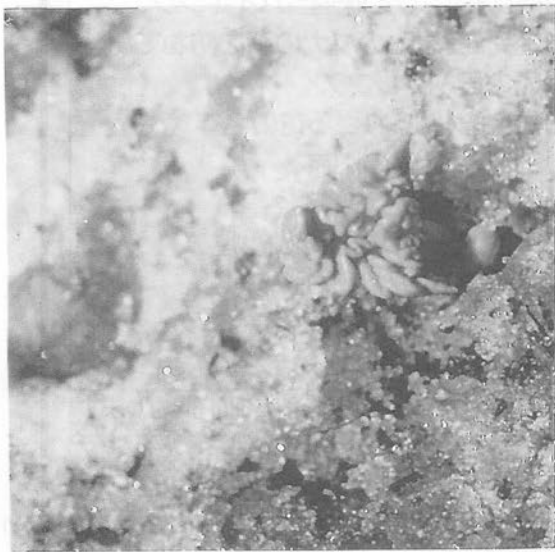
しばらくすると、図16-5のようにこの葉の真ん中から太くてやや赤みを帯びた茎がにょきにょき伸びてくる。ちょうどこの時期の茎が食べ頃で、ぱきと折って表面の筋をとってから食べると、スカンボのような酸味があって、疲れた体にも実に食べやすい。現地のポーターは腕に一抱えも採ってきてぼりぼり食べていた。あまりおいしいのでつい五本ほど食べたが、その夜は便がゆるくなって大変な思いをした。日本に帰って調べると、近縁のマルバダイオウの葉柄には適度の酸味があって食用に供するが、可溶性のシュウ酸塩を含んでいるので下痢を起こすことがあると書いてあった。恐らく私の場合もシュウ酸塩にあたったものと思われる。ところでこの植物は最後には図16-6に示すように細かな黄花が集まった花状茎をつける。

以上のストーリーは特定の植物について継続的に観察した結果ではない。しかし残雪の消える時期が場所によって大きく異なっているので、生育段階の違う植物が観察でき、それに現地案内人の話を総合してこのようなストーリーにまとめあげた次第である。

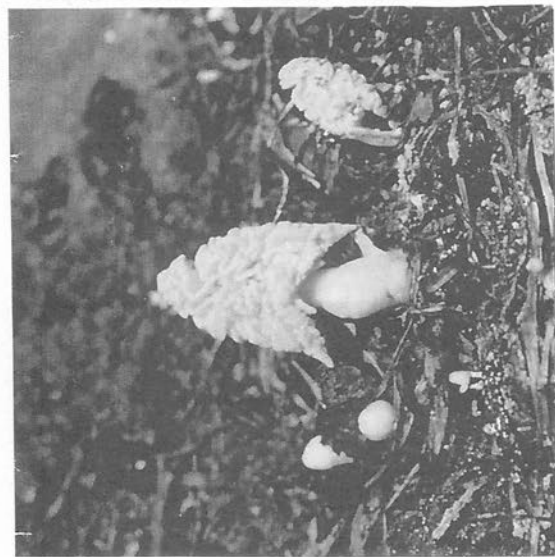
このたで科植物は普通の図鑑には記載がなくて分類に困っていたが、たまたま植物分類学の大家、



▲写真15. *Paraquilegia microphylla*



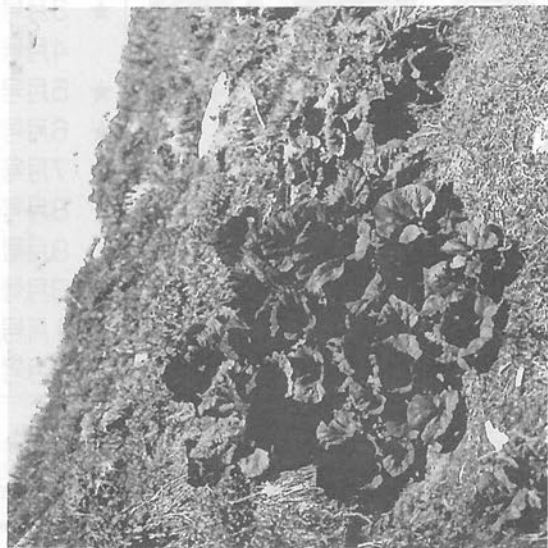
①残雪の中で赤芽を出す



②太陽にあたると黄衣に変わる



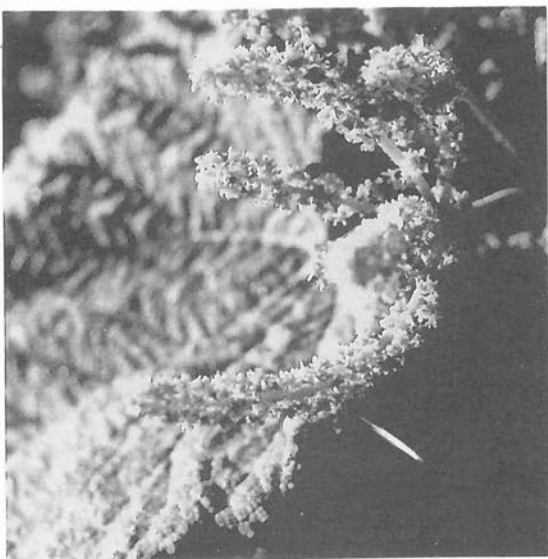
③葉緑素ができる



④大きな葉に成長する



⑤太い茎が伸びてくる



⑥花状茎になる

図16 カラダイオウ（たで科）の見事な変身

北村四郎の「アフガニスタンの植物」の中に図16-6とそっくりのモノクロ写真を発見してRheum tibeticum（たで科のカラダイオウ属）という種であることが分かった。この時は宝島で宝石を探し当てたような大きな喜びを感じた。それにしても、このたで科植物は何故雪の中に真っ赤な芽を出すのであろうか。一つの可能性としてカラコルムの夏は短く、生育して結実するまでに十分な時間を確保するために、未だ雪の残っている間に発芽するものと考えてみた。恐らく、雪の温度上昇と透過してくる太陽光の強さをセンサーに感じとって発芽し、成長エネルギーになる赤外線を元まで吸収するために赤衣をまとっているのではないかなどと色々想像している。

夏の終わりになると、このカラダイオウは葉緑素を失って再び元の赤色にもどる。そして、赤い枯葉が風に吹かれてあちこち転がる姿を見ると、この短命植物に限りない愛着を覚える。

旅の楽しさは未知との遭遇、体験にあるといわれている。その意味では多くの未知の花との出会いが可能なカラコルムの旅は限りない喜びを旅行

者にもたらしてくれる。

最後に植物分類について懇切なご指導を頂いた東京大学総合研究資料館の大場秀章博士と埼玉県秩父市の岩田豊太郎氏に厚く感謝する。

参考文献

Oleg polunin & Adam Stainton, Flowers of the Himalaya, Oxford University Press. Delhi, 1990

Yasin J. Nasir and Rubina A. Rafiq, Wild Flowers of Pakistan, Oxford University Press, Karachi, 1995

Mount Tuomuer Scientific Expedition, Academia Sinica, Mount Tuomuer Scientific Expedition, Xinjiang People's Press, 1982

薄葉 重、虫こぶ入門、八坂書店、1995

朝日百科、世界植物、朝日新聞社、1980

山の情報誌「岳人」

GAKUJIN

岳人

毎月15日発売（日・祝日の場合は前日）定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

2000年

特集

- | | |
|-------|------------------|
| ★ 1月号 | 雪山入門 日本の山を楽しむために |
| 2月号 | 現代山岳スキー 思想・用具・記録 |
| ★ 3月号 | 日帰り縦走、ひと味違うハイキング |
| 4月号 | 日本列島、恵みのブナの森を訪ねて |
| ★ 5月号 | 陽光の日本アルプス |
| ★ 6月号 | 日本全国、知られざる花の名峰 |
| 7月号 | 夏こそ、海と島の山旅 |
| 8月号 | はるかなる源流の峰々へ |
| 9月号 | 一度は泊まろう静寂の山小屋 |
| ★10月号 | 紅葉のみちのくの山並み |
| 11月号 | 冒険、修験、岩塔の山 |
| 12月号 | 野生動物と出会う山 |

（★は特大号・800円となります）

東京新聞出版局（中日新聞）〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674（直）
（東京本社）全国の書店で発売中／中日新聞販売店でも取りつぎます

トピックス

R・メスナー来日

メスナーが9年ぶりに来日した。今回の目的はドイツのテレビ局が作成する「神々の山」という10本シリーズの一つで富士山を取り上げ、その取材の為。メスナーはこの番組の制作に大きくかかわっている。山のバックグラウンド（神？）、登山の文化をこの番組で解き明かすのが目的だという。メスナーがアドバイザーをつとめるニッピンの主催で8月30日記者会見が持たれた。

メスナーはこの10年、グリーンランドやタクラマカン砂漠などに出かけており、イエティ探しにも行き「イエティ（雪男）は猿と人間を繋ぐ“ミッシング・リング”ではない、熊の一種だ。」というのがメスナーの意見であった。故郷に山の博物館も作ったという。現在ヨーロッパ議会に議席を持ち、環境問題などで政治に自分の意見が生かせるのではないかと、希望を持っているようだが、ヨーロッパ議会はまだ具体的に活動はしていないようだ。

7月に3人でナンガ・パルバット(8,126m)に新ルートから挑戦したが、頂上手前で断念しており、何故ナンガ・パルバットを選んだのか。との問いに、今の自分に新ルートからの登頂の可能性がある山はこの山だった。との答えが返ってきた。

地域ニュース

《ネパール》

中西部に渡航延期勧告

9月1日外務省からネパール中西部地域の一部が海外危険事情の「危険度3」渡航延期勧告との指定を受けた。同じような指定はインドのレーを除いたカシミール州と、同じくパキスタンのカシミール地域にも以前から出されている。

9月3日にはマナスル・トレッキングルートでスペイン人トレッカー6名とネパール人ガイド2名がマオイスト（毛沢東主義者）の武装集団に拘

束され、現金1,000ドル他を奪われるという事件もおきている。同地域はすでに「危険度2」観光旅行延期勧告となっており、今後の展開によっては、秋のトレッキング・シーズンに影響を及ぼすかもしれない。

左派ゲリラに対話提案

ネパールのデウバ元首相は朝日新聞記者に、同国の中西部を中心に抗争を続けるマオイストと呼ばれる左派ゲリラに対して「殺し合いはやめて、人道的な話し合いを始めよう」と、近く書面で提案をする事を明らかにした。抗争の犠牲者は1996年以來、1400人にのぼり、90年にネパールが民主化して以後の最大の国内問題になっている。デウバ氏は、この問題解決の為に政府が設置した高級委員会委員長を務め、4年間の抗争で初の和平交渉に携わる。(9/6 朝日新聞)

《中国》

ニンチンカンサ

日本教員隊の坂原忠清が単独でニンチンカンサ(7,206m)東面に挑み、8月9日に東稜から単独で登頂に成功した。

《インド》

6,140m峰に初登頂！

加藤孝子隊長以下14名の東京理科大OB隊は、スピティ地区の無名峰(6,140m)に挑み、8月5日、7日で全員が登頂、同峰の初登頂に成功した。尚、同隊はこの山をDowa Kangriと命名、IMFに申請してきた。

インド＝フランス合同隊
東部カラコルムで活動

ハリッシュ・カッパディア隊長等インド側5名、フランス側4名の東部カラコルム登山隊は7月31日にレーを出発。サセール・ラを越えシャイオク河を8月6日に渡り、古の中央アジア交易路をたどりインド側隊員はカラコルム峠を訪れた。その

後、一行は南リモ氷河からリモIV峰を目指す隊と、中央リモ氷河からイタリアン・コルを目指す隊の二手に分かれる。

リモIV峰隊は8月23日にフランス人1名とシェルパ1名がリモIII峰とのコルから西稜を経て登頂した。通算第3登になる。

中央リモ氷河を訪れるのは、1914年のF・フィリップ、1930年のG・ダイネリ以来の3回目、実に70年ぶりとなる。インド人3人とシェルパ4人の一行は前進キャンプを4つつくり、8月23日にイタリアン・コルに到達し、7キロ西方に及ぶテラムシェール氷盆を俯瞰した。帰路、中央リモ氷河右岸のミンバ峰(5,935m)に初登頂した。

中央リモ氷河隊を悲劇が襲ったのは27日だった。下山途中シャイオク河支流を渡っていたインド隊の4名全員が氷の浮く、冷たい流れに押し流されカイヴァンス・ミスツリ(32)が重いザックをはずす事が出来ずに、死亡してしまった。隊長のカッパディアも救助されるまで3時間も小さい岩のかげで待たなければならなかった。

ミスツリの遺体は軍隊のヘリコプターにより8月30日に故郷のムンバイ(ボンベイ)に帰った。残った一行は9月4日レーに帰着した。

《パキスタン》

イスラマバードで爆弾テロ?

イスラマバードの中央青果市場で9月19日朝、爆発があり16人が死亡、82人が負傷した。爆弾テロと見て、軍事政権のムシャラフ参謀総長が厳重な捜査を命じた。パキスタンでは爆弾テロが相次ぎ、今年だけで30回以上になっている。

(9/6 朝日新聞)

《キルギスタン》

国境に地雷敷設される

9月1日外務省からキルギス共和国の南部、タジキスタン、ウズベキスタンとの国境付近のオシュ州、バトケン州に、海外危険情報の「危険度4」家族等避難勧告に指定された。8月には実際に登

山隊の拉致事件も報告されている。その後、国境付近の全ての通行可能な道には地雷が敷設されたとの情報が入り、緊張はさらに高まっている。

ヒマラヤから

ターラ・リ通信

7月28日、山森隊長以下総勢6名はルオニ峰を目指して日本を出発しましたが、北京到着後、チベット東部の川が氾濫して道路が決壊し、修理に時間がかかるためルオニには行けない事が判明した。やむを得ずあらかじめ相談してあったクーラ・カンリの東にあるターラ・リ(6,777m)に転進する事にした。

8月2日、ラサを出発し、その日のうちに登山基地のロザ(3,850m)に到着。3日と4日ターラ・リの登路を偵察、主峰西面の氷河をルートに決定。8月8日山森隊長肺水腫のためロザ人民病院に入院。7日本隊は16頭の馬でドライ・ラに向かい8日、標高約4,800m地点にBC建設。翌日氷河の偵察を行った結果、ルートとなり得ないと判断し、山群(連邦)の北端のチュマチュンヨン(6,480m)に転進を決定。

14日標高約4,600mにBC建設。16日山森隊長BCへ復帰。18日標高5,400mにC1建設。C1まで一部沢登を混じえたルートで積雪は無い。24日、標高約5,800mにC2を建設して野沢井と太田が入る。25日、13時、両隊員がチェマチュンヨンの初登頂に成功。固定ロープは使用しなかった。両隊員は翌日にもチェマチュンヨンの北にあるマイシャ・カンリ(5,993m)に初登頂した。

27日には第2次隊の樋上、桐沢、佐藤がチェマチュンヨンを目指したが時間切れで登頂を断念した。

9月2日、BCを撤収してロザに下る予定であったが、降り続いた雨で川が増水し、道路が流され、右往左往し、結局ラサに帰着したのは7日と8日であった。詳細はヒマラヤ誌上で。

チョゴリ便り

チョゴリ北稜は残念ながら登頂することは出来

ませんでした。悪天の日が多く、ハイキャンプに登るに2時間かけてテントを掘り打さなければならませんでした。7550mが限界で、頂上雪田は胸まであったとの事。我々が断念して大本営からキャラバンを開始する日の中国隊の情報です。中国隊も7900mで登頂断念しました。北稜には我々日本隊、中国隊38人、米国8人、国際隊4人、ドイツ隊2人がトライしましたが、どの隊も敗退しました。

カシュガルにて 9/8 坂本

Books

「登山の運動生理学百科」

山本正嘉著

著者は長く「岳人」に連載を持ち、登山の為にトレーニングや生理学の第一人者であり、多方面で活躍している。それ以前に、1980年のシブリン(6,542m)北壁の初登攀者であり、この本の中でも紹介されるとおり、現役のヒマラヤニストである。

何よりこの本は、「こんな事あったりまえだろう。」と思ってしまうようなことまで念入りに実験をし、データで事実をしめしている点に驚き、著者の真摯な姿勢に敬服してしまう。予断を出さる限り排除し、基礎から初心者にも理解しやすいように丁寧に説明する。というスタイルが貫かれており、示唆に富む次項が多い。

過去に医者から説明されても、今一つ理解できなかった事が、なるほど、と脳裏にひらめく事もあるだろうし、自分の登山の経験が、そういうことであったのか。と納得でき、間違った知識や、自分の経験を検証するのに大変役に立つ。

本書の3分の1は高所登山について書かれたものであり、富士山トレーニングの位置付けなどおもしろい。前書きにもあるように、登山の運動生理学について「大筋での普遍性をくみとる。」ことができる。そうした知識を、自分達が行う実際の登山にいかに応用できるか、登山者の真価が問われるところだ。

多くの登山を行う人に読まれ、理解してほしい一冊である。東京新聞出版局 定価：2000円＋税
(中川)

インフォメーション

海外の山を知ろう！パート4

「今、トレッキングピークがおもしろい。」

主催：東京都山岳連盟海外委員会

日時：2000年11月9日(木) 18:30～21:00

場所：オリンピック記念青少年総合センター

参加費：500円(当日)

交通：小田急線参宮橋駅下車徒歩3分

申込み：当日

問合せ：東京都山岳連盟事務局

TEL03-5524-5231 (13:00～17:00)

第3回関東ヒマラヤ研究会

日時：2000年11月11日(土) 午後1時～12日正午

場所：山梨県・甲府市・山梨文化会館

(JR甲府駅北口徒歩1分)

参加費：13,000円宿泊費・資料代・懇親会費含む

11日だけ7000円(資料代・懇親会含む)

1日のみ参加3000円

申込方法：申込み用紙に記入の上、郵送もしくは

FAXで事務局まで。参加費は振込み

郵便振替：口座番号 00230-8-53819

加入者 第3回関東ヒマラヤ研究会

事務局：〒400-0074 甲府市千塚1-7-7 青木茂

TEL・FAX 055-252-6069

内容：登山報告・「ブロード・ピーク」「スパンティーク」「チョー・オユー」「コングール・チュピエ」「ディランで発見されたピッケルの謎を追って」 井上重治氏、他。

訂正

先月号で、労山隊のブロード・ピークの登頂メンバーが間違っていました。お詫びして訂正します。
登頂者、7/26倉橋秀都(40)、松本正英(36)
7/30近藤和美(58)、矢野利明(47)、HP

東京集会のお知らせ

日時 10月30日(月) 午後7時～

内容 ターラ・リ隊報告

場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

崑崙・北西藏縦断探査踏査メモ

阿部 淳

これは登山記録でないで放置していたが、近年このエリアも多少の話題を提供することになってきたので、その課題などを中心に記録を留めておくことにした。

(1)実施体制＝'97日中合同崑崙北西藏探検踏査隊

- ・動機。隊としては無人未踏の“死の土地”の初踏査。個人的にはヘディン、スタイン、瑞超らの体験を知り得る最後のチャンスとして。
- ・日本側。隊長、成田正次。副隊長、阿部淳。計11人（うち女性2人）。
*成田隊長は古くからの西藏砂漠探検家で北海道出身、関西在住。
- ・中国側。隊長、張保準（大自然旅行社副所長）。通訳、馬剛。科学探検家、趙子充（崑崙地区10回調査）。医師（外科）、料理人、運転手など、計13人。
*馬さんは1996年の防衛大隊・ケリヤ河上流域調査隊にも同行。趙先生は著名な地質学者で、'85中米ウルグ・ム

スターグ、'89立正大合同隊の両科学調査隊に参加、'58にヤンフウ（羊湖）、'94年にカラムランに達している。料理人の王勇さんは'88三国合同チョモランマ登山隊に参加。彼と張隊長だけが英語で通じた。

- ・車両。RV-3台、北京ジープ-1台、トラック-3台。計7台。
- ・協力。新疆ウイグル自治区旅遊局、新疆登山協会。
- ・合同。新疆大自然旅行社。
*自治区行政機関や企業には軍人出身者が多いせいか、今回も軍の許可や協力を得られた（車両、高山薬、無線装置なども）。

(2)固有の課題と対策

項目	課題	対処
①飲料水	塩水湖多く飲用不可	ウルムチから飲料水持参 （小形塩水濾過装置・浄水器も検討）
②高所滞在	5000m～5500m対応 （チャンタン高原）	ダイアモックス（個人）（隊としてはラシックス） パルスオキシメーター（記録、観察） ガモウバッグ、医療用酸素
③踏査時期 （車両）	・冬は雪の峠越えれず ・夏は融雪横溢で不可	・11月～4月は避ける ・6/中旬～9/初旬は避ける
④気温予測	Max＝コルラ（5月） Min＝5500m（チャンタン）	・20℃（平均気温）+12℃（平均最高差）+7℃（日差） ・△17℃（△6℃/1000m）＝39℃
⑤連絡救出	ナビゲーション 脱出不能対策	GPS、（インマルサットは当時中国許可困難） 軍用無線装置（中国側）→救出ヘリ？

*この計画につき山森欣一さんは“トランスポートの問題”の一言（HAJでは、閉塞集団の“人間（チーム）の問題”など有り得ない事だから）。

(3)車両による縦断地点〈ウルグ・ムスターグの東か西か〉

標高入りの有用な地形図はなく、僅かに「中国

登山指南」（'93.成都地図出版社）があるが、選択に至る情報はない。

- ・東。'85中米登山隊（初登）、'89立正大・

新疆大隊（二登）が、ウルムチ～北東部のマンナイ（芒崖）からウルグ・ムスターグ・アタ東のBC（5200m）を往復した。

- ・西。 '76.7-8. 中国科学院調査隊が南のニマ（尼瑪）からチャンタン高原を北上してウルグ・ムスターグ・アタ西側の「カラムラン・シャンクウ（峠=5400m）」を、難渋苦行のすえ往復した（タンクローリーも同行）。しかしキャタピラー車の牽引なしに、最悪ケースをどう突破するか？
- *あとは畜駄による記録だけで以上から、西側を有力視、中国側も西側を推薦、選択は現地の情報調べに委ね、二通りの日程を用意した（通常は主に登山情報しか視野に入りにくく、趙先生の調査、砂金取り情報は現地で把握し、結局西側を採用した）。

(4)記録

- 4/27. 関西空港～北京、4/28. ～ウルムチ
4/29. ウルムチ出発（ジープ4台、トラック3台）～コルラ
5/1. タリム河畔～タクラマカン砂漠縦断（タリム砂漠石油道路）～ニヤ
5/2. ニヤ～チャルチャン
5/3. チャルチャン・ダリヤ（谷）（GPS;N.37.40.34. E.85.58.40. H.2200m.）
5/4. 同谷、最後の民家1軒、以後無人。タリム砂嵐で空が霞む。H.3360m
5/5. 同谷、約300m強高差の順化登山（砂山）



▲ココシリ山脈と雪原の野ロバ

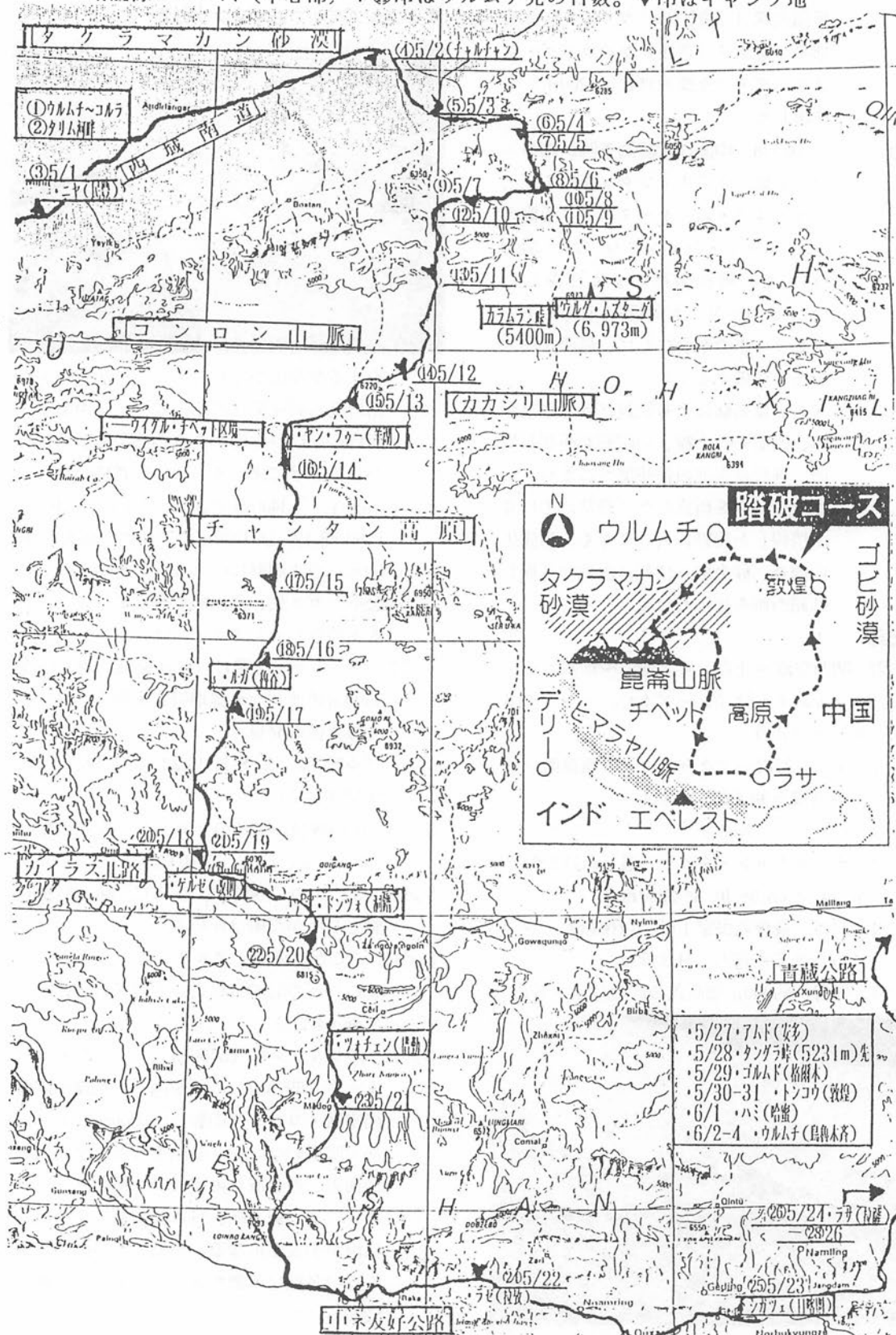
▼コンロン高地でのキャンプの雪



をするが高山が乏しい。この日から中国軍用の高所利尿薬「高原一号」を服用する。（カラムラン・シャンクウ不法金鉱から10日かけて逃げて来た4人の逃亡者に会う）

- 5/6. 同谷。 3400mで凍道。（GPS;N.37.75. E.86.48.19）H.4300mでアルチン越え、4100m。塩水湖畔にC。（3人の逃亡ジープに会うがガス欠、高山病で動けず。また夕刻人夫鈴なりのトラクターに出会う）
5/7. カラムランを避け（不法金鉱回避）西進。5000mのサバンナ湿地帯、霰降る。野性ロバの死骸等発見。トラック、ジープのトラブル頻発。（GPS;H.36.22.33. E.86.13.08.）H.5200mでC。
5/8. 中国隊員の順化のため、5/6のC地へ135km戻る。吹雪、△10℃。
5/10. 5/7のCへ戻る。△15℃。順化自由行動としたが高所は丘のみ。
5/11. ここから南下。アルチンとコンロンに挟まれた谷の5200m C地。（GPS;N.36.26.44. N.86.04.11.）
5/12. カラムラン峠（5400m）、ウルグ・ムスターグ（6973m）の西を南下。崑崙山脈の南支脈・ココシリ山脈（C.6000m）の北東部で吹雪のココシリの山を背景に全員の記念撮影。砂金取りの用具の一部散乱。パルスメーター値不順、日本側隊員一部の精神状況が不安定になる。高原一号の因か、両隊員数名脚足不調を訴える。5600mを越え、5200mにC。
5/13. コンロンを抜け、ココシリの北面を西進。

・踏査隊のコース（中心部）＊⑩印はウルムチ発の日数。▼印はキャンプ地



▼チャンタン高原北部 (4,750m)



ヤクの死骸など散見。

5/14. 朝△11℃、ダイヤモンド・クラストの雪の原をなお西(西南)進。チベットンボーダー辺を抜けて、目標としていたヤンフウ(羊湖) 辺からチャンタン高原を南進する(GPS;ヤンフウ、N.35.28.00. E.84.45.00.)。4750m C。(GPS;N.35.16.00. E.84.40.00)

5/15. ヤンフウの先は趙先生も初めての地。氷の草原を羊(ゲルゼ)の群れが走り、狼が追う。野ウサギもいる。車は相変わらずスタック、おまけに進路も大草原の中でロースト、バラバラ。とにかく寒く冷たい。

5/16. ザンセル・カンリの西側を南下。4900mの吹雪の高原から高度下る。

5/17. 朝△16℃。明るい大草原の春となる。ルガ(魯谷)も近い。集落は僅かなパオだけで、あとは羊、マニ、馬、犬と人だけのラマ教のエリアである。無人の崑崙チャンタン高原は僅か13日であった。この後、トラック、ジープと交わした。人間の住区となる。(ルガ、GPS;N.34.06.09. E.64.45.19)

5/18. 気温はプラス。ゲルゼ(改則)まで15kmの地点にC。もうカイラス北道である。トラックは街へ修理に行く。決定的難渋や長期停滞が皆無で計画日数は十分あるので、西のアリ(獅泉河)〜カイラスへ行きたかったのだが皆の疲労(精神沈滞等)でやめる。

5/21. ツォチェン(措勤)を過ぎてなお5500m、馬さんはここでキャンプしたいと言うが、低所がほしい。深夜、ようやく5150mに達してC。

5/22. ネパール国境の白い山々を楽しむ。

5/23. 北のニンチェンタングラと国境の山々。

夕方シガツェでホテルに泊り、25日ぶりに風呂にあやる。

5/24. ラサ〜青蔵公路(長距離バスあり)〜5/29. ゴルムド〜5/30. トンコウ〜6/20. ウルムチ〜6/05. 北京〜6/8. 関西。

・6/3はウルムチで記者発表会、州政府要人や関係者を交えた祝賀会(解散式)が催され、ゴビに始まりゴビに終わった、総距離7000kmにおよぶ探検踏査が無事終了した。

(5)えとせとら

・死の大地…中国は、ここをどうする? 資源開発か冒険観光開発? 人間が介入すべきか、永久凍土として放置すべきか。
・高原一号…“世界で一番良い高山病の薬”とか。効果あるけど副作用? (「ヒマラヤ」169号(’85.12月)参照)

・閉塞心理…企業、遠征登山など社会的な訓練がないと自己破綻をきたす。ストレスを自己管理できない自営業者や中小企業経営者など。

・隊の成果…コンロン(ウルムチ)〜チャンタン(ラサ)4000km、全行程(ウルムチ〜巡)7000km、世界初縦断。個人は Wild World. 体験。



▲チャンタン高原中央部にて

登山手引きの概要

登山許可申請

中国登山の場合、インドやパキスタンと同様に登山許可申請にあたって、(社)日本山岳協会の[推薦状]を必要としないので、各都道府県山岳連盟～日本山岳協会といった日本国内の煩わしい手続きはいらない。又、外務省を通す必要も無く、各登山隊が直接[中国登山協会(以下CMAと略す)]宛てに登山許可申請書を提出すればよい。この点では、インドの登山申請と同じである。

中国登山協会

中華人民共和国北京市崇文区左安門内大街10号
交 流 部
☎011-861-701-8106
FAX 701-1629

外国人が中国の登山を実施する場合の手続きなどが規定されている法律は、1991年7月31日に國務院が認可し、同年8月29日に公布施行された[外国人訪中登山管理法]である。

同法によれば、

- 1) チベット自治区の海拔5000m以上の山岳
- 2) その他の省、自治区の海拔3500m以上の山岳

で対外開放されている山岳へ登山する場合にこの法律が適用される。

また、上記の登山には[国家体育総局]発行のビザ(Fビザ)が必要となる。一般の観光ビザ(Lビザ)では上記の登山は出来ない事になっている。

1) 登山許可申請書の提出

登山の第一歩は、登山許可申請書の提出から始まる。中国は様々な自治区や省に区分されており、それぞれに人民政府がある。基本的には、それぞれの人民政府の下部組織である登山協会でも登山申請書を受取ることが出来るが、よほどの人脈がない限り「急がば回われ」で、全国の山を管理する機関であるCMAへ提出する方が無難である。

申請書の記入事項は、

①組織

派遣する団体名、国名、隊長の氏名、住所、職業、成年月日、年令、パスポート番号、発行日、発行地、本籍、海外経験、団体での地位などを記載する。

②目的

派遣する登山隊の目的が、登山だけなのか、科学調査などはあるのかを記載する。

③目標の山とルート及び径路

第一希望が許可されない場合も考慮して、第三希望まで記載する。山名と標高、ルート名を記載し、ベースキャンプに至る希望径路を記載する。

④エクスペディション期間

③の第一希望から第三希望に基づいて、それぞれ希望するベース・キャンプ設営から撤収までの期間を記載する。

⑤科学調査のテーマ

②の目的で科学調査を入れた隊は、具体的に記載する。

⑥写真撮影の目的

ビデオカメラなど持参する場合は、具体的に記載すること。

⑦エクスペディション実施前の偵察

本隊前に偵察隊を派遣する場合は、人数と期間

を記載する。

⑧ CMAに要請する援助

中国々内の旅行手続き、隊員及び隊荷輸送のためのトラック、ジープの手配、連絡官・通訳・コックの派遣、隊荷の通関、情報・資料の提供などCMAに依頼する事項を旧載する。

⑨ 中国への入出国日

登山隊が中国へ実際に入国し、終了後出国する月日を記載する。途中入下山などがある場合、その人数、月日を別記すること。

⑩ 食糧、装備等の数量

特別に大量の物を持ち込む予定がない限り、許可取得後明細を送付する旨記載する。

⑪ 自国内後援組織

派遣団体名及び後援する組織名を記載する。

⑫ 北京での代理人

関係者がいる場合は、氏名、住所、連絡先など具体的に記載する。特にいない場合は、その旨記載する。

※最後に申請書作成場所（通常は派遣母体所在地）、申請者氏名、作成月日を記載する。

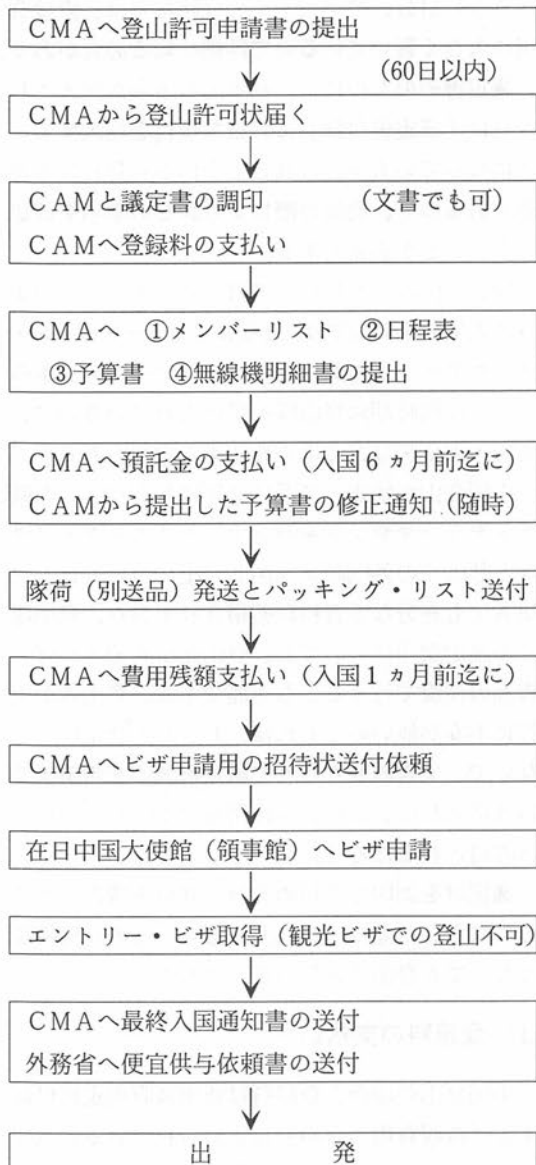
申請書作成を終えたら、挨拶文を付けてCMA宛直送する。登山規則では、CMAへの通信は全て中国語か英語となっているが、現在では専属の日本語通訳もいるので、日本語で申請することも可能である。

2) 議定書の調印

CMAでは、登山許可申請書を受理すると、一般に開放済みの山については、整理簿に従って登山隊に対して許可状を発行する。（規定では、問題がない山についての許可は60日以内に可否を決定する。）この許可状には、山名や登山時期が記入されていると同時に、議定書調印のために北京に代表を派遣するように書かれている。

議定書とは何か。中国の場合、国土が広大であり、登山隊が希望する高峰は、ほとんどが国境地帯にある。加えて国内整備が追いつかない状態のまま、登山隊からの要望に基づいて受け入れている。又、登山隊が知りたい現地の詳細についても、北京ではなかなか知り得ず地方人民政府に照会することになる。CMAにしても登山隊がどの程度

申請から出発までのアウトライン



の規模や日程かは知っていても登山隊の詳しい要求や、希望がどのような内容であるか、「登山許可申請書」だけではわからない。

そこで、CMAと登山隊の両者が会談して、両者の希望や制限について詳細に打ち合わせ、合意に達した時点で書面を作成するのである。従って許可状が届いた後に、登山隊が議定書調印のために訪中する希望月日と氏名を折り返し、CMAへ通知すると同時に、その時に知りたい事項をあらかじめ文書にて依頼しておくことが必要である。例えば、飛行機の最終地点からBCまでの輸送手

段（これもジープや馬など複数となる場合が多いだろう）日数、アプローチの径路などは、直接費用に大きく響いているので詳細に知る必要がある。

議定書そのものには、基本的な事項が記入され、さらに「議定書付録」に詳細な項目を記入することになっているが、これとて全体から見れば大雑把であるので、会談の際により詳しい事項を確認し合うことが必要である。

尚、登山ルートについては、チョモランマのように人気の高い山では、北壁にすらホーンバイン・クローアールとグレート・クローアールの2本のルートに同時期に登山隊を受け入れているので、地図・山姿図などでよく確認する必要がある。

中国登山が始まって既に20年になるが、この間、チョモランマやシシャパンマ、ムスターグ・アタなど数多くの外国隊が入山した山については、CMAでも充分なる資料が蓄積されており、登山隊との議定調印についても、登山隊が希望すれば、書面の往復で行うことも可能である。登山隊が実行に不安が無いのであれば、わざわざ北京に行かないで、文書のやりとりで議定書調印を希望する旨連絡すれば、このように情報の多い山については許可されるだろう。

議定書を調印して初めて登山許可を取得したことになる。口頭で「OK」をもらったのに何時までたっても登山できないケースもある。

3) 登録料の支払い

中国登山の場合、登録料は費用徴収規定に付属する「徴収費用の金額」に定められている。ハミリやビデオカメラによる撮影料も徴収される。

尚、「特別登録料」なる制度がある。「徴収費用の金額1992年」によれば、「新たに解禁された山と未踏の山」については、別表の登録料ではなく、登る山の標高に応じて、2700ドル（2000年6月20日現在1\$=107円）約29万円から最高41000ドル、約440万円の登録料を支払うのである。更に、（注6）には「ある特殊な山を解禁する場合は——特別な料金を徴収する」と規定されている。話題であったナムチャ・バルワについては本来七千メートル級の未踏峰であるから、最高27000ドル、約350万円の登録料になる筈であるが、注6に該当

されて高額の登録料となったのである。（ちなみに1982年のチョゴリの登録料は10万円円で当時のレートで約1千万円で驚愕したものである。）

私はこのような現実を踏まえてナムナニ、コンゲール、ミニヤ・コンカの登山を勤めているのである。あれほど素晴らしい山が僅か1080ドル約12万円の登録料で登れるのである。これを他の国の同クラスの山の登録料と比べてみると、ネパールのダウラギリIVやアンナプルナII、パキスタンのマッシャーブルムやラカボシ、インドのサセル・カンリなどが4000ドル、約43万円である。初登頂や外国人初を狙わなければ、中国の山の方が割安であることがお伴りいただけた事と思う。

また、この特別登録料は未踏峰だけではなく、「外国人に中国側から登られていない山」にも適用される。つまり、ローツェ、ガッシャーブルムなどの8千メートル峰や、トムール、ランタン・リ、ヤンラ・カンリなども対象となる。

話を登録料に戻すと、議定書を結ぶと同時に、定められた登録料の全額を中国登山協会へ送金しなければならない。

※口座名：Bank of China Beijing Head Office

※口座番号：7141 3455

※受取人：Chinese Mountaineering Association

※受取人住所：9 Tiyyuguan Road, Beijing, China.

※受取人電話番号：701-8106

4) 日程・予算などの提出

議定書を交換してから2ヵ月以内に、登山隊の具体的な行動計画とそれに基づいた中国々内で要する費用明細をCMAに提出しなければならない。

CMAでは提出された計画に沿って、各地方人民政府への手配や、飛行機、汽車、宿舎などの手配を行うのである。

・日程表

日程を可能な限り詳しく提出する。特に都市滞在の日数、希望する交通手段などは重要である。そのためには、計画に参加する人数なども確定しておかなければならない。もし、確定できない時は、予定数でも構わない。隊に先発隊や、途中で下山する予定がある場合などは、それらもあらかじめ日程に組み入れておくことが肝要である。

・予算

費用については、「費用徴収規定」に詳しく定められているので、日程と人数などを確認しながら積算する。項目別に算出するのが確実である。登録料と撮影料を除く費用の5%相当額をCMAへの手数料として加算することをお忘れなく。隊によっては最後に予備費を要求される場合もある。

カトマンズからチベット地区へ登山のため入国する場合は、中国側に出迎えにきたジープ等の走行距離計算については、ラサから計算されるので誤解のないように。又、チョモランマ、チョー・オユー、シシャパンマについては、別料金建ての「請負制」が適用される。

・無線機

登山隊が使用する無線機については、一時免税品として持ち込み使用することができるが、登山終了後は、再び持ち出さなければならないことになっている。このためあらかじめCMAに対して中国に持参する無線機の明細を申請しておく必要がある。①品名（アイコム）②型式（IC2-N）③周波数（144）④出力（1W）⑤数量（5台）

この申請によってCMAでは入国時まで許可を取得し、空港に書類を持参するので、税関で無線機の現物を出して書類に許可印を受けCMAに渡す。帰国時はこの逆の手続きとなる。無線機はどの国でも重要物品であるので取り扱い慎重に。

5) 預託金の支払い

中国登山が活発になるに連れて、様々なトラブルが出てきた。その知恵の中から生まれたのが、この預託金制度と云えよう。以前は、前述した予算を提出し、それがCMAによって承認（通常は回答がない場合が多かった）されれば、議定後3ヵ月以内に20%を支払い、残額は、本隊が北京に到着するまでに支払えばよかった。ところが、1987年1月の費用徴収規定の改定により、預託金制度が登場したのである。預託金とは勿論費用の前払いであり、登山隊にとっては大変な苦痛であろう。別表の期限は、登山隊の入国予定日を基準として支払う。たとえば8月16日に中国に入国するHAJミニヤ・コンカ隊の場合は、議定書の締結と同時に登録料として1080ドルを支払い、2月16

日までに2160ドルを納入し、中国側に提出して承認されている予算の総額（登録料も含む）26302ドルの残額23062ドルを7月16日までに送金するのである。もっとも最近では中国の物価の高騰などもあり、規定に則った予算総額に予備費として1~2千ドルを予め納入するよう求められることもある。この場合は、予算残額に上乗せして送金し、登山終了後清算する。

この制度の厳しいところは、入国1ヵ月前迄に予算額から既に納入した預託金額を引いた残額を支払わない場合は、ビザが発給されないことである。ネパールやパキスタンと大きく相違する点であろう。社会制度が異なる最大の特徴がここにある。

次いでに費用の清算について触れておきたい。登山終了後、北京において実際に掛った費用と予算として支払った差額について精算を行う。それぞれの自治区や省での費用については、チベットの場合ならラサで項目別に計算された書類を担当者がチェックし署名する。地方では登山規則の解釈などに中央とは異った考えを持っている場合もあり、又、事実関係で隊員と数字が違ったりすることも間々ある。このような場合はなるべく感情的にならず、お互いに意見を出し合って合意するよう努力した方がよい。経由地や北京の費用は北京で出された書類をチェックする。総合された精算書に、登録料、撮影料、CMA手数料が加算されたものが、登山隊がCMAへ支払うべき総費用となる。これから納入済みの金額との差額が不足した場合は、US\$、円のいずれかで支払う。レートは中国が固定したものである。少額の場合は元でも可能であろう。余剰金は送金してくれるが、受取り銀行名や銀行住所など全て「英文」で要求されるのであらかじめ用意しておきたい。

6) 隊荷の発送

既に述べたように、中国登山では、山の高低に関係なく隊員の中国入国6ヵ月前には、「預託金」の支払いがある。この支払いが済む時期は、登山準備も佳境に入っている頃である。

計画の具体化が進むと、あれこれと中国側に質問したり確認したい事項が出てくる。これについ

ては随時文書による照会によるしかないが、CMAから打てば響くような回答が来ることは少ない場合が多い。

従って、既に何隊か入山した事のある山の場合は、なるべく経験者から情報を得る方が確実である。この場合注意しなければならないのは、初期(1980年～1982年頃)の頃と現在では、交通手段、宿舍事情、物資状況などはかなり変わっていることである。又、中国の場合、「特殊」な隊が結構多いので、それらの隊のアレンジの経験を真に受けて参考にすると大変嫌な思いをすることになると思う。従って、初期の隊や、特殊の隊からは、「山」そのものの情報を得るように心掛けることが肝要であろう。

さて、隊荷の発送であるが、どの時期に中国へ向けて発送するかは、山の位置や隊の規模などにより「議定書付録」に明示される。多くのケースでは、通常の隊の場合、チベット新疆の奥地に入山する場合は、登山隊が入国する三カ月前迄に「北京」へ到着するようになる。青海や四川などは二カ月前迄。それとは別に、酸素ボンベやガス・カートリッジなどの危険品は、四カ月前に北京に到着しなければならない。これらの危険品を中国々内で輸送する便が少ないためである。

隊荷の梱包が済んだら、速やかにパッキング・リスト及び送り状(Invoice)を作成してCMAへ各3部送付しなければならない。

隊荷をアナカン(Unaccompanied Baggage, 旅行者手荷物別送品)輸送する場合、北京の通関は荷送り人が居なくてもCMAが代理で通関してくれる。従ってInvoice 及び Air Way billの荷受人名には、CMA気付で隊長名、登山隊名を書いておかなければならない。

成田～北京間の航空路線では航空券のディスカウントがなく飛行距離の割には高いチケットを買わされている。そのため旅行代理店によっては手荷物のエクス・パッケージについて便宜を計ってくれるところもあるので相談してみるとよい。

ここで、アナカン輸送について少し触れてみよう。

先ず、隊荷の発送予定日が決ったら、その約1ヵ月半前位に航空荷物輸送業者へ連絡をして、目

的地迄のキャリア(飛行機)をブッキングして買う。この時に必要なことは、

- 1) 隊荷の現地到着希望日
- 2) 隊荷の概算重量と個数
- 3) 隊荷の形状・寸法

などを連絡しなければならない。

こうして隊荷輸送のキャリアを予約した後、登山隊は隊荷の集荷・梱包と出発前の一番慌ただししい時期を迎えることになる。

次にアナカン輸送に必要な書類について述べてみよう。

- 1) パッキング・リスト(Packinnng List) 5部

持ちだし隊荷の全てについて各カートン毎にパッキング・リストを作成する。リストには、品名、数量、重量、価格(※1)等の項目を記載する。(※1: 価格表示には2通りある。1つは、C.I.F. (Cost, Insurance & Freight) で、保険料運賃込み価格。もう1つは、F.O.B. (Free on Board) で、積み込み渡し価格。どちらの価格表示なのかを明記しなければならない)

パッキング・リストを作成したら、それらの物品を消費・非消費物品に分けてリストを作る。

- 2) 送り状(Invoice) 5部

送り状には、カートン総個数、マーキング名、品名、総価格、荷送り人の住所・氏名、荷受け人の住所・氏名等を記載する。

この場合の注意点としては、荷送り人と荷受け人の氏名は、同じく隊長名とする事。

- 3) 全隊員のパスポートのコピー

新パスポートは1頁のコピー。

尚、各税関により対応が異なるため事前に代理店に相談すること。

- 4) 全隊員の航空券予約証明書1部

東京から搭乗する飛行機のフライトナンバーの書かれた航空券の予約証明書。代理店に依頼して発行してもらう。

- 5) 登山計画書(和文) 1部

以上の書類が揃ったら航空貨物輸送業者へ隊荷を引き渡す。ファクシミリやジェネレーターのような機械類は、通関時に別送品として認め難いと云ったクレームをつけられることがある。そのような場合は、それらの品の登山活動における必要

件を記した願い書を提出しなければならない。尚、1)～5)までの書類の必要部数は、それぞれ代理店の指示に従うこと。又、税関への「願い書」が必要な場合もあるので代理店の指示に従う。

通関が切れたら、輸送業者からエア・ウェイ・ビル (Air Way Bill) を受けとる。

Air Way Bill を受けとったら、送り状を付けたパッキング・リスト3部及びAir Way Bill 3部をCMAへ送付する。

又、危険品ガス・カートリッジの空輸については、1個の内容量によって取扱いは異なるものの可能であるので、代理店とよく相談して万全を期すことが肝要である。

尚、パッキング・リストを受取ったCMAでは通関のため、中国語に翻訳して税関に提出する。中国語のパッキング・リストでない場合は、英文、和文どちらでも翻訳の必要があり、日本隊の場合CMAで日本語通訳が担当することが多いようなので和文のリストが良いと思う。

次に中国隊における隊荷の関税については、「外国人訪中登山管理法」第21条に規定されているとおりである。

中国登山隊荷持込みについて

2000年6月13日、中国登山協会から「中国登山の際の持込み隊荷」について、以下のような情報が伝えられた。

記

北京国際空港は中国政府の顔を代表する。税関商品検査等は非常に厳格です。目下、中国へ来る登山荷物の中で困難をもたらすものは主に酸素、ガス、食品、薬品等です。最近、中国へ来る登山荷物は税関内に阻まれて、検査を受ける期間も長くなったことによって、倉庫使用料及びその他の費用が増大しました。

今後、中国登山隊が荷物を持ち込む場合は、次のような方法を使ってもらいたい。

- 1.少量の荷物は登山隊入国と一緒に持ち込むこと
- 2.大量の荷物は船で天津新港まで輸送すること
- 3.チベット内の登山隊はザンムーから持ち込む
- 4.登山隊荷物を北京に空輸しないこと。

7) 隊員名簿の提出

別送品を送り出すと、国内出発準備も終盤である。この時期になると、参加隊員の顔ぶれもほぼ出揃う。なるべく早い時期に隊員名簿をCMAに提出する。

隊員名簿には、氏名、成年月日、住所、電話番号、勤務先名、海外経歴、パスポート番号、発行日などを記入し、写真を貼付する。

隊員名簿が提出されると、CMAでは既に隊から提出されている行動計画(日程表)に基づいて北京でのホテルや観光の手配、各人民政府への手配、飛行機、汽車などの手配を行う。従って既に提出済みの日程に変更が生じている場合は、この時に一緒に訂正しておく必要がある。

最近の中国の都市では、外国人ばかりでなく中国各地からの旅行や移動が激しく、ホテルの確保や飛行機のシートを押えるのに四苦八苦しているのが現状である。変更があった場合は頃合いを見計らって早目に通報しておく事を心懸けたい。

尚、隊長の変更については、パキスタンなどは認めないことになっているが、中国の場合は特に規定はないので変更は可能である。

8) CMAへの依頼事項

ネパール、パキスタン、インドでの登山と異なり、中国登山では、飛行機、バス、ジープ、トラックの予約から、ヤク、馬、ポーターの雇用まで全てについて隊員が直接にタッチすることができない。これらの事は全てCMAが隊の代行者として当事者に接することになる。その費用として、5%の手数料を支払うことが義務付けられており、選択の余地がない。

「外国人訪中登山管理法」第17条には、外国人が中国国内で登山を実施するに当たって、中国人を使用する場合は、「連絡官がこれを行う」と規定されており、一応このことを踏まえて、以下隊の事情によって若干なる点はあるが、隊があらかじめ、CMAへ依頼すべき事項を掲げてみる。

・通訳、コックの派遣

議定書付録で人数や場所が記入されているが、変更が生じた場合などは、速やかに連絡する。

- 中国側要員に対する装備の支給

中国側スタッフに対する「支給装備」は別途費用を支払うことになっている。

- 中国側要員の炊事用具、燃料、テントの借用

ここで言う物は全て「BCでの中国側要員に必要な物」である。圧力釜、ストーブ、炊事用テント、燃料については「登山隊」が用意して提供しなければならない。しかし、彼等の炊事は、登山隊のように小ざっぱりしたものではない。それに見合う物を登山隊はなかなか用意できない。可能な限り中国側に用意してもらって借用料を払う方が現実的である。しかし、中国側に無い場合は、隊が用意しなければならない。

又、炊事用テントとは別に、中国側要員が日常使用するテントも当然別に隊が用意する。

- ジープ、トラック、ヤク、馬などの手配

これらも議定書付録でそれぞれ記入されているが、計画が変更された場合は、速やかにその数量を連絡すべきである。

以上の事項を、隊員名簿を送付する時期にまとめてCMAへ連絡しておくといよい。

- 購入品の依頼について

中国国内で調達できる物を日本からわざわざ持参する事はない、との発想で、食料品や日常生活用品の購入を依頼する隊があるが、現実的にはなかなかむづかしい。

現在では、登山の前線となるウルムチ、カシュガル、成都、ラサなどで相当な物が手に入ることは事実である。10人程度の隊が登山期間中補給する野菜など充分手に入る。しかし、これをあらかじめCMAに依頼するのではなく、隊員が到着した時点で、滞在中に自分の目で見て確かめて購入することを勧めたい。依頼した物がなくて、代用品が揃えてあった時は立腹しても、同じ物が無くて自分が探した場合の代理品には腹が立つどころか、これぞ上手な遠征と鼻が高くなるものである。充実した登山をするには、なるべく手抜きをしない方がよい。それだけの時間は短い都市滞在中でも作れるものである。

諸準備も順調に進み、いよいよ出発も近づいてきた。しかし、まだまだ予断を許さない。これからが遠征の出発前としては大いに緊張し、あちこ

ちの出来事に目を配る必要があるのである。

何しろ目的地は、ほとんどの登山隊の場合、国境地帯にあるのである。まずは国際政治の動きに注目しなければならないし、目的地周辺の天災などの情報も素早く分析しなければならない。

9) ビザ用招待状の依頼

隊が北京に到着する1ヵ月前までに、承認された予算から既に支払った預託金を差引いた残額の全部を送金しなければならない。例えば、チョモランマの計画で予算が10万\$であったならば、預託金として入国の1年前に5千\$、6ヵ月前に5千5百\$を送金しているので差引8万9千5百\$を1ヵ月前までに送金するのである。(登録料別)

送金の通知をCMAに出す時に一緒に、在日中国大使館(総領事館)に申請するビザのための通知書を送るように依頼する。

また、隊員の氏名に変更がある場合は、この招待状を依頼する時までにはあらかじめCMAに対して変更通知をしておくことが肝要である。

10) ビザの取得

中国登山のビザは、国家体育総局発行の「F」ビザとなる。観光ビザでは登山許可の必要な高峰の登山はできないのでこの点を確認すること。

CMAから「ビザ通知書」が届いたら、必要書類を揃えて旅行代理店へビザ申請を依頼する。隊で用意する書類は、パスポート、写真一枚、それに所定事項を記入したビザ申請書(1枚)である。申請書にはパスポートと同じ本人の署名が必要である。署名以外の所定事項は代理店でも記入できる。そのためには、出生地(都道府県)、旧姓、住所と電話番号、勤務先名と所属、中国入国の有無などである。もっとも登山隊で余裕があれば自分達で直接申請してもよいが、申請方法はちょくちょく変わるので確認する必要がある。

通常は申請して一週間でビザが交付される。しかし、日本の祝祭日や、中国の祝祭日などがあるので、通知書の届くのが遅かった場合は、申請を慎重に行わなければ出発日に間に合わないこともある。急ぐ場合は特急料金を払えばよい。

Fビザは、一回の入出国のみであり、発行日か

ら90日以内に中国に入国しなければならない。交付手数料は3千円である。

Fビザの申請が早すぎて登山期間中に有効期限が切れるケースもあるが、その場合は現地（ラサ、成都、ウルムチなど）にてベース・キャンプに出発する前に、あらかじめ期間の延長を申請することができる。パスポートと写真があれば1～2日間でビザの延長が可能であろう。

11) 入国通知と日本大使館への依頼

さて、登山隊出発までの最後の段階に入った。まず、隊員の変更が無い、予約した飛行機の席はOKになっているか。これらが確定したら、出発の10日か1週間前にCMAに対して最後の入国通知を行う。これには、隊名、隊員数、当日持参する隊荷の個数や形状、重量、到着便名と到着時刻、などを書く。CMAではこの通知を元にして、出迎えのバスやトラックなどを決め、宿舎や次の目的地までの交通手段の準備を行うのである。

次に忘れ勝ちであるが国内の手続きがある。外務省への依頼状である。これは何のために必要かと云うと、万が一（ではなく2.3%の死亡率であるから百に二）に遭難事故が発生した場合、遠い異国で世話になるのはやはり現地の日本大使館なのである。そのために、本省である外務省を通して北京の在日日本大使館宛に「便宜供与の願い書」を提出する必要があるのである。

・提出書類

外務大臣官房文化交流部長宛 願い書 1部

〃 念書 1部

和文の登山計画書 1部

以上を大臣官房文化交流部文化第二課に持参若しくは郵送すると、北京の日本大使館宛送付される。

尚、登山計画書には、隊員名にはふりがなをつけ、昼夜連絡のとれる人の電話番号を必ず記載すること。事故連絡が外務省に入っても連絡のとれない事が結構多い。

無事帰国できる場合は、北京などで大使館宛「帰国する」旨のハガキの一通も出しておくことが望ましい。

登山計画書を考える

中国で登山を行う場合には、ネパールのような日山協の審議を受ける必要がなく、したがって計画書の書式も隊によってまちまちである。隊長以外は名前だけしか記載されていない計画書も見うけられる。

海外に出かければ、ホテルに泊まるにもパスポートが必要となってくる。パスポートの盗難、紛失、怪我で入院などしたとき、こうした次項が記載されていると助かる。パスポートはコピーを持っている、血液型はザックに書いてある等と言っても、本人だけが解っていたり、隊長が一括して持っていたり、必要な時にきちんと機能するとは限らないのだ。全員が持っている計画書には、生年月日、血液型、パスポートナンバー、緊急時の連絡先、主要登山歴が記載されているといざという時に本当に助かる。全てがコンパクトにまとめられている計画書をつくりたい。

■ 寸 感 ■

ヒマラヤ各国の治安が少々不安定である。キルギスとネパールでは登山隊、トレッカーが拉致されるなどして影響をこうむっている。注意されたい。昨今の日本人若者達のなんともお気軽な「貧乏旅行」ブームの影響もあり、外務省関係は神経を尖らせているようだ。そうした、無知、無策の旅行者、登山者の増加に伴ってお役所が最近にわかには言い出したのが「自己責任」という言葉である。登山の世界ではあたりまえの事だと思っていたが、それがあたりまえでは無くなった頃に、こうした言葉が認知され、人々の口から多く発せられるようになる。まずは自らの行いを正さねばなるまい。

ターラ・リ隊も無事帰国した。大雨で予定が狂いぎりぎりのスケジュールでの帰国であった。そうした中にも、日本で帰国を待つ側への配慮を忘れずに。
(中川)

事務局日誌 (9月)

8月30日(木) R・メスナー記者会見(帝国ホテル・中川)
9月9日(土) ヒマラヤ347号発送
9月10日(日) ターラ・リ隊4名帰国
9月25日(月) 東京集会13名

ヒマラヤ No.348 (11月号)

平成12年10月10日印刷 12年11月1日発行

発行人 山森欣一

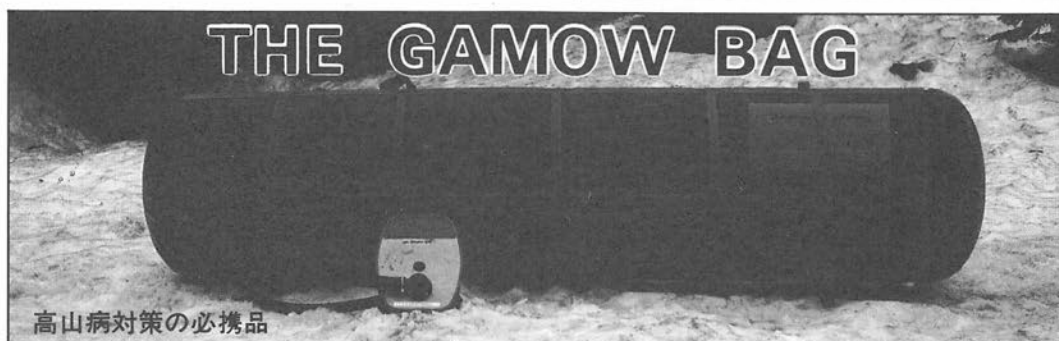
編集人 中川裕

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)

●パルスオキシメーター

(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ

トレッキング・
登山隊の許可
取得から航空券・
現地手配までお引き
受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・
パキスタン・中国・
東南アジア・アフリカ・中南米～

トレッキング・海外登山・シルクロード・
秘境旅行のパイオニア



株 式 会 社

西遊旅行

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■本 社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1
岩波書店アネックス5階
☎ 03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396
■大阪営業所 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5階
☎ 06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966
■カトマンズ連絡事務所 (JAI HIMAL TREKKING / SAIYU TRAVEL)
P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL
☎ 221707, 224248

●格安航空券はこちらに！



キヤラバンデスク

キヤラバンデスク東京(住所:本社内) ☎03(3237)8384(代) FAX 03(3237)0638
キヤラバンデスク大阪(住所:大阪営業所内) ☎06(6362)6060(代) FAX 06(6367)1966

◆パンフレット請求や個人旅行のお申し込みは
フリーダイヤル をご利用下さい
(通話料無料)

0120-811395

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp/>)

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店／〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店／〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店／〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館／〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店／〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店／〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店／〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店／〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店／〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブルーカ店／〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブルーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店／〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店／〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店／〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店／〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店／〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店／〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店／〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メルオーダー)／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所／〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004